



ある幻想の現在：小野十三郎と田園都市

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-04-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 前川, 真行 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00006035

ある幻想の現在 —小野十三郎と田園都市¹⁾

前川 真行

I. 美しい町

1.

佐藤春夫に「美しい町」という作品がある²⁾。主人公である画家が、いまは億万長者となったかつての旧友に出会い、彼の構想する理想都市の建設に協力するという小説である。いましがた理想都市と述べはしたが、それを都市と呼ぶのはいささか大げさにすぎるかもしれない。というのもそれは、隅田川と小名木川が合流する中州、その埋立地に建設されるはずの小さな区画であり、小説の中の登場人物にそう呼ばせているように、町と呼ぶべきスケールのものであったからだ。

多少なりとも西洋文学に興味を持つ人であれば容易に気がつくように、画家である友人からの聞き書きという体裁をとったこの物語は、トマス・モアの『ユートピア』をその形式上の手本としている。佐藤春夫は、こうした文芸の創始者でもある古典学者の文学上の工夫を正しく理解し、また同じ形式を採用することで一定の敬意を表明しているのだ。であれば、この理想都市の規模をせめてもう少し大きなものにしてもよかつたはずであるが、彼が物語の舞台を隅田川の中州というささやかな規模にとどめたのは、おそらく時代の精神に忠実たらんとしたからであろう。

この頃、旧来の居住区域への人口流入による密集化、さらに都市部における工場の着実な増加は、あきらかに都市の景観を変えつつあった³⁾。たとえば「大窪だより」から「日和下駄」へと到る、永井荷風の初期の随筆 — 彼は佐藤春夫の師でもあった — をあらためて読み直してみてもいい。江戸から東京への変化は、この随想にも影を落としていることに容易に気がつくであろう。そして当然のことながら、荷風も鋭敏に察知していたようにこの変化は市部の密集化だけではなく、その拡張、すなわち郊外化をも伴っていた⁴⁾。

¹⁾ この小論は、2014年10月12日、早稲田大学において開催された日本政治学会、企画委員会企画「災厄の政治学」において発表された「都市／国家と災厄」の発表原稿に手を入れたものである。当日は司会に小田川大典氏（岡山大）、報告は筆者のほか尾原宏之氏（立教大）、またコメンテーターとして伊藤光利（関西大）、北原糸子（立命館大）両氏が登壇された。政治学者ではない筆者を招くという見返りの薄いギャンブルを行った企画委員会の方々、また今日的な政治学とは似ても似つかぬ反動的な筆者の発表に対して、呆れつつも丁寧な応答を返していただいた当日の登壇者に、この場を借りて感謝を申し上げたい。

²⁾ 佐藤春夫『美しき町・西班牙犬の家 他六篇』岩波文庫、1992。

³⁾ この小説が書かれたのは1919年である。工業化のテンポにかんしては、1937年以降の総力戦に向けた急速な時期に比すべくもないとはいえ、日露戦争から第一次世界大戦の時期は激しい都市膨張の時期である。横山源之助を嚆矢とするこの時期のさまざまな証言を見られたい。

⁴⁾ 「東京は其の市内のみならず周囲の近郊まで日々開けて行くばかりであるが……」「日和下駄」『荷風全集』中央公論社、1949、第十卷、pp. 140-141。

江戸の人、荷風が変わりゆく下町、河口の東京に思いを馳せたのにたいし、紀州新宮の人、佐藤春夫は、開けつつあった田園を仮の住処に選んだことはよく知られている⁵⁾。工業化は、それが否応なく排出する廃棄物によって周囲の自然環境を変化させる。またそれが引き寄せる人口は定住ではなく、高い流動性をその特徴としてもつ人びと — 国内であれ、国外であれ移民 — である。滑らかな空間の上をすべるように移動してゆくこうした人びとが作り出す人間集団は、土地という基盤のうえに安定的に成立する共同体とはまったく異質なものである。その多くが雇用労働に従事する、こうした種類の人びとにふさわしい、移動と定住を折衷した新しい共同体が必要とされるだろう。自然の残る郊外に建設される田園都市はそのひとつの回答であり、そしてそれはこの時代、現実的に可能なただひとつの解であるように思われていた⁶⁾。ただし、このとき選ばれた田園とは、いわば人の手によって馴致され文明化された自然であり、拡張された庭園である。正確には、馴致されたはずの、というべきであろうが。

2.

こうした田園への志向、そして誕生しつつあった開発業者（と金融機関）によって実際に作られることになったこの理想の町を、いましがた「時代の精神」と呼んだのは、ひとつにはそれがたんなる個人の趣味や嗜好の実現にとどまらない、社会改良を目指した事業だったからであり、いわば社会政策の一部として理解されていたからでもある⁷⁾。1896年（明治29年）に、新橋の有楽軒で産声を上げた日本における社会政策学は、ちょうどこの頃、学としての役割を終え、具体的な政策へとその段階を移行しつつあった⁸⁾。郊外の「田園」にゼロから作り上げられる住宅地は、こうした時代における、実業界の側からの社会改良のひとつの表現であったことはたしかなのだ⁹⁾。田園都市は、開発者に莫大な利益をもたらすだけでなく、都市の市民としての彼らに、積極的な社会的価値を付与する名誉に満ちた実業として、熱狂的な支持を受けることになるだろう。

もっとも「田園の憂鬱」を書き、また直後に「都会の憂鬱」を書くことになる佐藤春夫がその熱狂を共有していたかどうか定かではない。が、少なくともテキストからは微妙な感情が見ては取れる¹⁰⁾。ひとつにはその町を、おそらくはそれが不可能な試みと知りつつ、かつての歓

⁵⁾ そのときの経験をもとにした『田園の憂鬱』は同じ1919年に発表されている。

⁶⁾ 同じ1919年に『樂しき住処』を発表し、またしばしばこの「美しき家」の主人公のモデルに擬せられる同郷の西村伊作はこのころ現実に郊外都市建設の構想を抱いていた。田中修司『西村伊作の樂しき住家 — 大正デモクラシーの住い —』はる書房, 2001, pp. 153-4.

⁷⁾ 「近時社会問題の重視せらるゝこと亦往日の比にあらず。中に就きて所謂家屋問題、飲酒問題の如きは蓋し其最たる者なり。されど田園都市の理想にして若し能く実現せられんか、総ての社会問題は悉く茲に解決せられるべきを疑はず。」内務相地方局有志編纂『田園都市』博文館, 1907, p. 23.

⁸⁾ 社会政策学会とその役割については拙稿「生の統治」『人文学報』第84号, 2001, pp. 177-218.

⁹⁾ じっさいの田園都市については、山口廣編『郊外住宅地の系譜 — 東京の田園ユートピア』鹿島出版会, 1987. また別の興味深い論点として中川理『重税都市 — もうひとつの郊外住宅史』住まいの図書館出版局, 1990.

¹⁰⁾ 「故人の遺志を、偉大なそれであるからして時に残忍にも思える自然と運命の力が、どんなふうにくぐんぐん破壊し去ったかを見よ。それらののこされた木は、庭は、自然のはつらつたる野蛮な力でもなく、

楽街、隅田川の中州に置いてみたことが挙げられよう¹¹⁾。文字通り誰のものでもなかった土地であり、永続性という土地が土地たる所以を欠落させた空間である。第二に、この「美しき町」という物語は、かつての旧友による詐欺事件だったことがこの小説の終わり近くで明らかにされる。シニカルとはいわぬまでも、少なくとも批評的な距離がそこにあったということはいえるだろう。たしかに現実の田園都市も、その少なからぬものが、計画の段階で日の目を見ぬまま終わり、また首尾良く完成にこぎ着けたとしても、かならずしもその理念通りのものが実現したわけでもなかった¹²⁾。この郊外の地宅地建設がブームとなり、それが展開してゆくにつれ、増大した都市人口のうちで、新たに成立しつつあった中間層 — つまり日本経済の動向と浮沈を共にするしかない人びと — を対象とせざるをえなかった以上、この時代において、この事業が不安定たらざるをえないのは、必然的なことでもあった。

このことはアメリカ同様、日本における田園都市も、その提唱者であるハワードのそれとは異なり、職住近接を前提とした完結した共同体とはなりえなかったことをある程度説明するだろう。戦後本格化してゆくこうした郊外開発は、それゆえ、大量輸送手段を保有する民間鉄道会社との共同開発が必須の条件となってゆく。郊外における田園都市は、当初より完結した都市というよりも、都心部へと労働人口を送り出す、住宅地であったのだ。それは都市の拡大とともに、じょじょに呑み込まれ、空間的にも独立した小宇宙であることをやめてしまう。いずれそれは巨大都市の住宅地へと変貌してゆくだろう¹³⁾。われわれがこの工業都市の理念を理解するまでにはしばしの時間が必要だったのであるが、あるいは佐藤はどこかでそれを直感していたのかもしれない¹⁴⁾。

2 bis.

結果として、佐藤はこの小説で描かれた架空の町を、二重に存在しないものとして描きだすことになるだろう。作中、主人公は司馬江漢が描いた江戸の風景版画によってこの場所を発見

また人工のアーティフィシャルな形式でもなかった。かえって、この両様の無造作な不統一な混合であった。そうしてそのなかには醜さというよりもむしろ故もなく整然たるものがあつた。この家の新しい主人は、木の影にたたずんで、この廢園の夏に見入つた。さて何かにおびやかされているのを感じた。瞬間的なある恐怖がふと彼のうちに過ぎたように思う。さてそれが何であつたかは彼自身でも知らない。それを捉える間のないほどそれはすみやかにひらめき過ぎたからである。けれどもそれが不思議にも、精神的というよりもむしろ官能的な、動物の抱くであろうような恐怖であつたと思へた。』『田園の憂鬱』岩波文庫、1951、p. 26.

¹¹⁾ 隅田川の中州とは、現在の日本橋中州であり、もともとは文字通りの川の中州であつた。江戸期に一度埋めてたてられたが、のち取り壊されるも、1886年（明治19年）にふたたび埋め立てられ、浜町、箱崎とつながられた。あいだを運河が走っていたが、戦後にそれも埋め立てられる。

¹²⁾ 戦間期は、急激な成長ゆえに、金融政策は拡張を強いられるにもかかわらず、金本位と固定レートの矛盾に苦しんだ時期でもある。

¹³⁾ それゆえ、われわれの戦後は、そのさらなるスプロール化によって形成される。

¹⁴⁾ おそらくそのもっとも適切な表現は丹下健三の「東京計画1960」を待たねばならなかつた。実現の契機をいっさい欠いたこのプランは、しかしその後の一連の国土計画、とりわけ新全総を予告するものとなっている。

するのであるが、おそらく意図的であろう、作中で描写されるその風景は、まったく別の版図の風景である。それは不在の場所に重ね合わされた架空の江戸であった。

さらに、この「美しき町」の実際のプランを作り上げるのは公募で探し当てた老建築家である。彼はみずからの理念に従い、実現する見込みのないプランを精密な模型のかたちであとには残す。だがこの不遇の老人が理想としていたのは、維新の初期段階において理想とされたが、しかしいつしか捨て去られてしまった本格的な洋風建築、つまり本来あるべきであった明治の欧風建築である。その西洋は、明治が当初目指し、そして捨て去られることになった西洋、そうあるはずだった明治である。

この二重の不在のもと、ユートピアはもはやみずからの場所を見いだすことはできない。もし、このプランを実行に移したならば、現実の郊外開発が直面することになるさまざまな困難に向き合わざるをえなかったはずである。佐藤の小説の主人公が橋の上から見たであろう砂州は、なにもない平らな砂地ではなく、夜ともなれば遊郭の灯ともる遊興地区であった。そこには買収と立ち退きという問題が待ち構えていたであろう。あらゆる都市計画には、土地一分割された大地 — というきわめて特異な財の（再）分割と利用の制限、そして地方ないしは中央政府による収用が伴われる。それはその後、東京が見舞われることになる二度にわたる災厄のあと、後藤新平と石川栄耀という二人の卓越したプランナーが直面することになった困難でもある。結果として土地区画整理という独特の手法をこれら先駆者たちは我がものとしてゆくののだが。なるほどユートピアは、たとえば太平洋という未知の空間に見いだされるか、あるいは未来というまだ存在しない世界におかれるしかないものであった。佐藤春夫は、同時代の東京の内側に、ユートピアを二重の不在として巧妙に描き出したのである。

それは震災が、東京を瓦礫に変える4年前のことであった。

II. 「精神のある非情性」について

3.

12日間に東京を壊滅せしめたあの凶変が戦慄なら、壊滅以前の東京の市街はさらに悪性の戦慄であつた。あの疥癬のような東京市街を私は全く嫌悪していた。東京に生まれて幼児の思出と古い伝統から来る遺伝とに育まれた私は、極端に東京を愛したが故に、亦極端に近時の東京を忌んだのである。あのだらしない宿場女郎の様な東京市街の粉飾を見てくる度に、私の隠棲熱は飽く事なく燃え上がるのであつた。燃え上がりながらまた私は思い切つて東京を去るに忍びなかつたのである。自分に故郷無しという嘆を、あの繁華な東京を眼前に据ゑながら発しなければならなかつた。あの東京を故郷とはどうしても思へなかつたのである。…中略… 今度灰燼に帰した東京の焼原を見て、私は始めて自分の故郷を見いだしたのである。私は焼け失せた東京の姿を上野から見下ろして、なつかしさに耐えへぬ愛人を思ふ様な涙にぬれた。故郷よ、故郷よと繰り返した¹⁵⁾。(傍点は筆者。以下同様)

これは震災直後の11月、彫刻家であり、詩人でもあった高村光太郎によって『報知新聞』に発表された文章である。震災に先立って高村は、やはり荷風同様、フランスから帰国後、変わりゆく江戸の姿を嘆じながら、総合芸術家としてあるべき帝都の姿について、いくつかの改良の提案を行っている¹⁶⁾。だが、震災という未曾有の出来事は、良くも悪くも抑制された、あるいはどこか諦念を隠すことを諦めたような、私たちのよく知る知識人としてのスタンスを彼に放棄させることになる。もちろん彼は、すでにこのとき妻、智恵子とともに東京を後にしている。だが彼は、来たるべき東京一空を取り戻した東京だったかもしれない一の姿を高揚とともに描き出そうとするだろう。

その文章は六つの節に分かれた、それぞれに小見出しがつけられている。引用文が含まれた節には「夢一極東の田園都市」という題が付されている。つまりここでの結論は「この蓬莱山の首都は世界に稀有な田園都市の姿を以て現はる可き」だというものである。再建された東京はひとつの田園都市になるべきであると詩人は考えたのである。興味深いことは、引用の前半部分からわかるように、この田園都市は、すでに震災前に失われていた江戸の再生として幻視されていたということである。東京を瓦礫の山に変えた震災のあと、詩人は、すべてが奪われた廢墟のなかで、失われた江戸を幻視していたのである。来たるべき東京とは、失われたがゆえにそうあるべきであった仮構の江戸でもある。失われていた江戸が、来たるべき東京として再生されるには、ひとたびすべてが破壊される必要があったとでもいうように。

新しい秩序の設立には、「指導者も、秩序もなく、敗北し、すべてを奪われ、引き裂かれ、縦横に踏みしだかれ、ありとあらゆる荒廢 ruina に耐えている¹⁷⁾」状態は絶好の機会であろう。なにしろ「あまりに大き過ぎる」「災厄」にたいしては「防衛と再起は同意味¹⁸⁾」になるのであるから。このとき災厄に洗い流された大地は、ひとつの「はじまり」の契機であると同時に始原の過去への回帰ともなる。この災厄のうちに過去の江戸と、未来の東京が詩人の想像力によって、連続した相のもとに立ち上げられる¹⁹⁾。詩人は瓦礫のなかに失われた過去とそうあるべき未来とを同時に幻視している。廢墟は過去の江戸と未来の東京の真の姿を、その瓦礫のうちに保存していたのである。

だが、土地を覆い隠している瓦礫を取り去り、ひとたびその表土が空気に触れたならば、現れる土地は分割され「誰か」に帰属している土地である。覆いが取り去られれば、そこにはすでに目に見えぬ線が引かれている。高村はすでにそのことに気づいていたのだろうか。上に引

¹⁵⁾ 高村光太郎「美の立場から」『高村光太郎全集』第四卷、筑摩書房、1957、pp. 290-1。

¹⁶⁾ たとえば震災に先立って『東京新聞』に掲載された「藝術雑誌」（1917）など（上掲全集第四卷、pp. 234-254）など。また1914にはÉmile Magneの都市論（*L'Ésthetique des Villes*, Mercure de France, 1908）の翻訳を雑誌『我等』に発表している。ちなみに荷風による『日和下駄』（1915）にはマニユの影響が見て取れる（作中ではマニユという表記で言及されているが、おそらくはマニユと書かれていたであろう手書き原稿からの転記ミスであろう）。

¹⁷⁾ N. Machiavel, *Le Prince* (éd. bilingue), PUF, 2000, p. 205.

¹⁸⁾ 高村前掲書、

¹⁹⁾ 「大災害発生時がゼロ時点になり、それ以前（傍点）の時間がそのいわば紀元零年に向かって進行していたように感じられる。災異のスクリーンには、大破局があらかじめ運命づけられていた世界史像が映写されるのである。」野口武彦『安政江戸地震一災害と政治権力』ちくま新書、1997、p. 30.

いた文章の直後、高村は「新たに起きる可き東京」が「健康」で「正直」で「晴朗」な東京となるには、こうした刷新が長い時間を掛け、幾度となく繰り返されなければならないとも感じていた。あたかも、その後の帝都の運命を予感していたかのように。

4.

家々は
いつ建つのか知るよしもない。
吹きつさらしの荒漠とした中に
それは早くも煤ぼけ古びてゐる。

海は暗く深くそして濁っている。
海を見ていると
私はなんとなく賭にかつたような気がする。

「(2) 防空上都市内近接地を含めたる地域に工場の分布と大工場の配置を計画化すること一」

精神の書を見るごとく
私はそれを見た²⁰⁾。

これは敗戦直前の1943年に出版された『風景詩抄』に収められた、アナキスト詩人、小野十三郎の「風景(五)」と題された詩の一節である²¹⁾。彼は、このとき、「短歌的リリズム」「短歌的抒情」への抵抗として、茫漠として即物的な工場の風景を新たな詩の対象として発見したところであった。叙情性が否定されるべきものであったのは、直接的には、定型への依存がもたらす批評精神の欠如にたいする批判という意図があったからだ²²⁾。この時期の小野の詩は「分かりやすい」。分かりやすすぎるくらいだ。定型を排する以上、語の意味内容が優先され、また、叙情なるものを排する以上、あえて即物的な描写が好まれもするからだ。

このような背景知識をもとに、先に引いた小野の詩を読むとき、やはり、ひとは工業化してゆく大阪の荒涼とした風景をここに探そうとするだろう。最後の段、詩人に強い印象与えたと

²⁰⁾ 小野十三郎「風景(5)」『風景詩抄』湯川弘文社、1943(『小野十三郎著作集』第一巻、筑摩書房、1990、p. 175.)

²¹⁾ 難波に生まれた小野は、高校を出たのち、大学進学のため上京し、アナキストたちと交わる。30年代の政治状況は、小野に自由な活動を許すことはない。弾圧ののち彼は帰阪するが、小野が詩人としてみずからの基盤を築くのはむしろこの時期以降である。総力戦の時代に対応するべく進められる重化学工業化は、大阪をやはり急速に変えてゆくだろう。小野が故郷大阪の地で見いだしたものは、変わりゆく葦原の風景であった。

²²⁾ 小野十三郎「短歌的抒情」前掲『著作集』、第一巻、pp. 499-500。小野については多くの評論が存在しているが、最良の文章は、釈超空こと折口信夫についての評伝でもある富岡多恵子『釈超空ノート』岩波書店、2000である。

される(2)という番号が付された、いかにも行政文書然とした一節も、そうした即物性を表現するものとして読み飛ばされてしまうかもしれない。だがよく読めば、風景の描写は最初の二段で終わっており、最後の一段には、工場という単語が用いられてはいても、かならずしも詩人が描こうとした工業の大阪が描かれているわけではない。「精神の書」という言葉から、そこに理念を読みとることも可能なかもしれないが、しかし端的に言えば、この一節は分からない。この詩のなかにとどまるならば、「工場」という言葉をいつものように詩人は肯定的にとらえている、そのように漠然と想像するのがせいぜいである。そもそも詩を分かろうとすることが悪いのだろうか。

もっともこの一節の出自をたどることは、それほど難しいわけではない。種明かしをすれば、この文章は前年(1942年)の6月企画院によって提出された「工業規制地域及工業建設地域ニ関スル暫定設置要綱」から採られたものである。それが分かるのは、ほぼ同じ頃、花田清輝を編集長として出版されていた『文化組織』に連載されていた評論、「詩論」につきのようにくだりがあるからである。少し長くなるが引用してみよう。

産業立地ならびに人口配置の適正化を期するため、昭和十五年九月、国土計画の要綱が閣議で決定されて以来、企画院第一部が中心となつて、その具体化が計られてゐたが大東亜戦争が進展によつて、共栄圏の経済建設が行はれるにつれて、国内でも、生産力拡充のために各地に工場の新増設が続出した。これをそのままに放置する時は、国土計画の策定並びに運用に大なる障害を生じ、同時に、時節柄、防空上にも悪影響を及ぼす恐れがあると云ふので、この度、取敢へず応急対策が講じられ、去る六月二日の閣議で、工場規制地域及び工場建設地域に関する暫定措置の決定を見るに至つた。乃ち、六月三日の大阪朝日新聞朝刊第一面はトップに「京阪神など四工業地に工場新増設を認めず」と云ふ大きな見だしを掲げてゐる。四工場地とは、東京、横浜を中心とする地方。名古屋地方。京都、大阪神戸を中心とする地方。下関、北九州五市を中心とする地方の四つである。今後、一部の例外を除いて、以上の土地では工場新増設は許可されない。資本主義的見地から自由に競争的に行はれて産業立地に対して、一つの画期的な国家規制が下されたわけだ。内地において、さし当り急造に生産力の拡充を必要とする業種については、適当な工業建設候補地が定められ、これらの地域の立地条件の整備を計る方法が講じられる。無論、これが今後経済界に及ぼす影響など私にくわしく判る筈がない。はつきり云つて予想も何も付かない。この計画を一読して得た私の感動は、云はば、精神のある非情性に関するものだ。風景環境そのものをも見事に裁断し更新する所の或る圧倒的な力の存在である²³⁾。

²³⁾ 小野十三郎「詩論—郷土性について」『文化組織』昭和17年(1942年)7月号, p. 23-4(戦後この連載は『詩論』真善美社, 1947として出版されるが、連載時の文章とは多少の変更がある。ここでは記述がより詳しいために連載時の文章を引用した。

この時期、小野を突き動かしたものは、短歌的叙情の否定であったと述べた。小野の詩においてそれは、新しい「風景」の描写というかたちで遂行されている。旧来の形式にたいする批判が、工業の造り出した都市の新たな景観の把握というかたちを取ったのである。じっさいこの『風景詩抄』と題された彼の詩集に現れる風景とは、「瓦礫の山」であり、「巨大な煙突」と「瓦斯タンク」によって成立した湾岸には、家々の吐き出す排水が「泥溝(どぶ)」を伝って流れ込む。「ガラスや軽金属でできたランダアやアルンハイム²⁴⁾」、この重工業地帯、「大葦原」には、「幾億千万本のガラス管」が突き刺さっているだろう。むろんこのガラス管とは煤煙をはき出す煙突である。

しかし、われわれにとって重要なことは、さらにその先にある。この新たな景観は、まるで早送りでもするかのように、きわめて短い期間に成立したもののだが、そのひとつの理由は、この景観の変化は、第一次大戦からいわゆる戦間期を挟んで第二次大戦にいたる、いわゆる総力戦の準備の結果だったからである²⁵⁾。それは計画の時代におけるひとつの国家プロジェクトとして遂行されていたのだ。それが「精神の書」であったのは、この新たに成立しつつあった風景が、国土計画、すなわち都市計画という、自然と人為との交点において成立することを、詩人に教えたからである²⁶⁾。さて、もうそろそろ種明かしをしてもよいであろうが、引用した文章の直後、「それについて思い出すのは、」という言葉に続けて、小野は、まさしく前節で検討した高村光太郎の田園都市論を俎上に載せ、徹底的な批判の対象としているのである。短歌的叙情を代表する詩人とは、まさに高村光太郎そのひとであり、田園都市はその表現だったのである。小野の「大阪」、これら「大葦原」とは、田園都市に対立し、それを批判するものとして見いだされた風景であった。「高村さんの本所、深川大草原の幻想は、たしかにすべての詩人の夢であり欲求である」のだが、あくまで「古い感傷の域を脱してゐない」。それは「文化住宅式田園都市論ではないが、まだまだそれは文化臭い」。「くさぼうぼうの、生産を無視した大荒蕪地の保有を絶対視しているけれども、なおそれは「公園」²⁷⁾」にすぎないと詩人は断じる。

²⁴⁾ この一節は「私の人工楽園」から採った。もちろん、すぐ後で述べるように、ここで言及されているのはエドガー・アラン・ポーであり、蛇足を承知で言えば、佐藤春夫と小野十三郎をねじれつつなく水脈である。

²⁵⁾ 第一次大戦は日本においても重化学工業化を促進した。20年代に入り一時停滞するものの、30年代に再び加速する。さらに37年以降の戦時経済は、一層急速な — というよりは強引な — 重工業化を進展させるだろう。1932年から1944年まで、もっとも単純な数字として、第二次産業従事者の数だけを見ても、595万から1011万人へと倍近く、416万人も増加している。しかもそれが戦争準備のためであったことを如実にあらわしているのが機械工業（事実上、兵器生産のための、ということだが）従事者の増加であって、同時期52万人から431万人へ、379万人の増加である。中村隆英『日本経済史7 「計画化」と「民主化」』岩波書店、1889, pp. 18-19. (32年の数字はいわゆる梅村推計、44年は総理府統計局、『昭和19年人口調査集計結果摘要』) この時期の簡便な通史としては岡崎哲二『工業化の軌跡』読売新聞社1997をみよ。

²⁶⁾ ただし正確に言えば、この人為には行政という政治的なものだけではなく、工業化が促進する経済的なものが含まれており、とりわけ後者は第2の自然とも呼びうるものでもある。

また都市計画についての、こうした把握はなにも小野だけの孤立した試みではない。たとえばハンナ・アレント（森一郎訳）『活動的生』みすず書房、2015, p. 178 (H. Arendt, *Vita acti-va order om tätigen Lben*, Piper, 2002, p. 176)

²⁷⁾ 小野十三郎「詩論」前掲書, pp. 24-5.

年々四五十万の人口集中をおこないつつある過大都市に私は生活してゐる。「農村」や「田園」ではとても追いつかないのだ²⁸⁾。

5.

もちろん正確を期すならば、彼がここで批判している田園都市と、賞賛の対象となっているかにみえる工場の地方分散は、かならずしも矛盾するものではない。むしろ一体のものといってよい。そもそもこの通達にしてからが、—「新体制」のもとでの多くの制作がそうだったように—内務官僚が防災、つまりは戦争という有事を口実に長年のプランを実行しようとしたと読むことすらできる。細かい話をすれば、この工場の地方分散という政策は、それまでこの政策導入の中心であった内務官僚によってではなく、近衛新体制の下、企画院に主導されて導入されたという違いはあるのだが、基本的にはそれがドイツの地方計画ならびに国土計画の日本への適用であり、その延長線上にあるという点は変わらない²⁹⁾。それはおおよそ田園都市を前提にしたうえで、対象となる領土の規模を地域ないしは国土というより広い水準まで広げ、複数の都市間の関係を制御の対象とするものである。要するに、大都市への人口集中を避けつつ、諸都市の安定ないしは繁栄を維持することを目的としている。その意味では、田園都市論と、工場の地方分散という政策自体、対立するどころか実は同じ方向を向いているといつてよい。小野がこうした背景をどれほど理解していたかはわからない。おそらくは十分に理解していたわけではないだろう。だが小野が、そこに連続性以上に、切断を見いだしたことは、むしろこの詩人の慧眼を証明している。小野はそれを「精神の或る非情性」と呼んでいたのだ。

6.

この「精神の或る非情性」とは、分散か集積かという対立を相対化するようななものかであり、それはおそらく資本主義という欲望の体系にたいする断固とした政治的意志というべきものであろう。その限りにおいて、国土計画がもたらす「分散」は、「押さえがたい倦怠感」を伴った「田園の自然」の表現ではない。ちなみに、小野は戦後書かれたあるエッセイのなかで、ポーの「アルンハイムの地所」と「ランダアの家」（それぞれ佐藤春夫の「美しき家」と「西班牙犬の家」のモデルとされる小説）に言及しつつ、これらの小説が「自然や生活環境を人工的に変えてゆくという営みを通して、現在置かれている状態からどうにかして脱出しようとする人間の願望を美しく表現している物語³⁰⁾」であると語っている。このとき分散は閉塞（あるいは

²⁸⁾ 同上, p. 23.

²⁹⁾ 国土計画については祖田修（『都市と農村の結合』大明堂, 1997）や、御厨貴（『戦時・戦後の社会』中村隆英編『日本経済史7 「計画化」と「民主化」』岩波書店, 1989）の先駆的な研究以降、また注目が集まりつつある。とりあえず近年の研究を挙げておけば八東はじめ『思想としての日本近代建築』岩波書店, 2005, pp. 464-497や、中島直人他『都市計画家石川栄耀 — 都市探究の軌跡』鹿島出版会, 2009, pp. 146-184など。ただし枠組みとして、相変わらず、いわゆる「総力戦体制論」の一部を構成するものとして読まれている。

³⁰⁾ 小野十三郎「奇妙な本棚」『小野十三郎著作集』第三巻, 筑摩書房, 1991, p. 10. ちなみにこの文章は「自然は恐ろしく退屈だ」と題されている。

倦怠、退屈)からの脱出として捉えられている。

分散は — 田園都市論は — たしかに自然である以上に、政治的意志の表現であった。同じ年に出版されている石川栄耀 — 北村徳太郎と並んで地方計画ならびに国土計画を日本に導入した中心人物 — の書物には、じっさい、こうした読解を可能にする当時のコンテキストがどのようなものであったかがはっきり記されている。そこにはあのローゼンベルグ — もちろん『二十世紀の神話』の著者である — から、賛意を表すわけではないが、さりとして明確に批判を加えるもないまま、大量の引用が淡々と行われている。「自由移住権の名の下に血統の優秀なる命が血を汚す大都会の中に止めどなく流れ入り、職を求め、店を構へ供給を増大し需要を吸収し、需要がまた移住病を募らせて居る。」しかしこの「自由移住による人間や商品の集積の進歩は有害無益」であるがゆえに、「『人道主義的な』民主主義者が好んでなすように割部屋や屋根裏部屋に住まはせておいてはならない」。そうであれば「新来者をもつと小さな町村に転住させたり田舎に移住させたりしなければならない」のであるから、端的に言えば「移住禁止を嚴重に実行する」ことが必要であると³¹⁾。

さらには、あたかも詩人の直感と声を揃えるように — あるいは声をそろえたのは詩人であろうか —、このナチのイデオログは力強く断言するだろう。「牧歌趣味は過去のもの³²⁾」なのだ。そう、「空想都市の一つの試みが、牧歌的な「田園」ではなく、もっと現実的で卑近な「工業の地方分散」の中で実現されようとしていること」こそが「面白い」。微妙な差異にたいする繊細な感覚を証言するように、小野は正しくもそう記していたのであった³³⁾。

高村光太郎をして、「あの不作法に四方に這い出す市街の集合に過ぎないもの」、その「見かけ倒しと、無定見と、悪趣味と、お先走り³⁴⁾」と言わしめた都市の膨張する欲望を統御しようとするれば、それは高村が理解したかぎりにおける田園都市ではなく、この大東亜共栄圏における生産体制および防空体制の構築を理由とした「圧倒的な力の存在」しかないだろうという詩人の直感の正しさは、その後の国土計画の現実の歴史が確証しているかのようにもみえる。たしかに、われわれは都市の不定形の欲望をついぞ制御することはなかったからである。

7.

このことは、ナチの国土計画との表面上の類似という点にとどまらず、分散という手段を達成するために — つまりアナキズムの伝統からすれば、中央集権的な国家を解体し、(そうした政治権力からの)自立と、(小共同体の成員みずからによる集団的自己決定としての)自律というふたつの価値を両立するために — 行われたはずの政治構想が、現実の政治体制のもとでは、きわめて暴力的かつ強圧的な手段によってはじめて、その実現が可能になるという皮肉を

³¹⁾ 石川栄耀『国土計画 — 生活圏の設計』河出書房, 1942, pp. 84-5.引用は明記されていないが内容から見て、おそらくローゼンベルグの『二十世紀の神話』からであろう。Alfred Rosenberg, *Le Myth du XXe siècle*, trad. de l'Allemand par Adler von Scholle, Avalon, 1986, pp. 518-527.

³²⁾ 同上, p. 88.

³³⁾ 小野十三郎「詩論」前掲『著作集』, p. 306.

³⁴⁾ 高村前掲, p. 291.

説明するものともなる³⁵⁾。

今日、経済成長率の減速と、それに伴う財政赤字、さらには少子高齢化をその理由として80年代以降より進められてきた福祉国家の再編は、国家のスリム化と地域共同体の自助努力にその希望を託すかぎり、多かれ少なかれ、今日的なアナキズムの矛盾した性格を文字通り体现している。それは上から進められる地方分権、中央によって強いられた地方自治でもある。今日、時代の精神は上からのアナキズム、強いられた自律という倒錯した姿でわれわれの前に現れている。自律／自立か、さもなくば破綻を。いささか教訓的な物言いをすれば、全体主義のディストピアは小さな国家の顔をすることもできるのだ、とでもなるうか。

7 bis.

これはアメリカにおけるハリケーン、カトリーナの襲来をきっかけとして、ナオミ・クラインとレベッカ・ソルニットによって問題とされた論点でもある。そしてわれわれはわれわれの311のあと、この二人の著者を再発見した（前者はエリート・パニックという概念よって、そして後者は災害資本主義という概念よって）。だが両者には共通した論点がある。すなわち災害後の社会の再建にあたって、そこにはどのようなかたちの共同性が、望ましい共同性として存在しているのか、あるいは、また存在しうるのか。

たしかにソルニットがいうように、そしてクラインもある程度は認めるように、災害の後には、人びとを拘束していた過去の制約が一掃され、そのことがまったく新しい、平等と自由とを両立する特権的な相互扶助の共同体を形成するチャンスとなる。

しかしこの稀な瞬間はそのままでは長くは続かない³⁶⁾。このことはクラインが強調する点であるし、またソルニットもある程度は認めていることでもある。いつかは「幻滅的な現実直視の局面」への移行が行われることはたしかであり、そしてそれはわれわれの現実でもある。だがもしこの幻滅を避けようとするならば、そして、もしこの祝祭を永続化しようとしたならば、それは人為的に、つまり政治的意志よって、危機を、例外を常態化させるということになるはずである。

*

とはいえそれはもう少し後の歴史である。詩人の想像力を刺激した「精神の或る非情性」は、この時代においては、国土計画というかたちでは実現はしない。戦局の悪化とともに、国土計画はまた現実性を失い、企画院は早くも翌43年には廃止されていたからである。

³⁵⁾ これはすでに一度別のところでも問題にした点ではある。拙稿「〈3・11以後〉と社会的なもの」市野川容孝・宇城輝人編『社会的なもののために』ナカニシヤ出版、2013、pp. 287-296.

³⁶⁾ 野口武彦はいささか辛辣に、災害ユートピアとは「PTSD性ユーフォリア」ではないのかと示唆している。野口前掲書参照。あるいは精神医学においてはそうであるのかもしれない。

Ⅲ. ユートピアの憂鬱

8.

「詩論」が連載されていた『文化組織』は、花田の奮闘にもかかわらず、やはり企画院が廃止された同じ43年に廃刊となる。43年は、詩集『風景詩抄』が出版された年でもあった。

瀘川を埋め
湿地の葦を刈り
痩せた田畑を覆へし
住宅を倒し
未来の工場地帯は海に沿うて果しなくひろがつてゐる
工業の悪はまだ新しく
それはかれらの古い朽ちた夢よりもはるかに信ずるに足る壮大な不安だ。

私は見た。
どす黒い夕焼けの中に立つて
もはや人間も鳥どもも棲めなくなつた世界は
またいい。

これが田園都市論にある種の欺瞞を見ていた小野が大阪で見いだした風景である。^{いち}瀘とは、田畑のあいだを縫って走る用水路のことを指す。たしかに大阪の拡大はこうした農地の転用によって行われていた。だが、小野のこうした詩が、ながく輝くことはない。小野が発見した葦原は永遠に失われるからだ。出版翌年、つまり44年の暮れからは、米軍による空爆がよいよ本格化する。結局、分散は建物疎開へと矮小化され、広げられた空間は、「バラックの安普請」によって埋められるだろう。高村の嘆きから20年、ふたたび東京は瓦礫と化す。空爆の目標が東京だけではないことはいうまでもない。翌年からは、大阪も大規模な空爆を何度か経験する。敗戦の直前に行われた砲兵工廠への空爆はその象徴となるだろう。皮肉なことに、同時に破壊でもあるような刷新は、こうして高村を批判した詩人にも訪れたのである。

一望焦土と化して、瓦礫や土にまでも赤錆が来ているようなところを見ると、わたしはそこに人為的な破壊力の暴威を感じるよりも、何かしらもつと運命的な自然の大荒廃に似たものを感じる。いままだ壕舎などで雨露を凌いでいる人たちのことを考えると、私のこういう空想はつつしむべきだが、私は一都市の壊滅そのことに対しては少しも感傷的にはなれない。何ごとにもよらず、物が徹底的に破壊されているさまには精神の憩いのようなものがあるからだ³⁷⁾。

³⁷⁾ 小野十三郎「破壊ということ」『多頭の蛇』日本未来派発行所、1949、p. 194。ここで詩人は崇高という問題枠組のなかにいる。

続く文章で、小野はこの廢墟の情景を「沙漠」と表現する。意図が分からないわけではないが、しかしいささかそれはミスリーディングでもある。「廢墟の大阪」は小野自身がそう書いているように「急造のバラックが建ち並らんで」いる風景でもあったからだ³⁸⁾。高村であれば、「あの不作法に四方に這い出す市街の集合に過ぎないもの」あるいは、「見かけ倒しと、無定見と、悪趣味と、お先走り」と言っただろうか。

9.

空爆と敗戦が生み出したこの都市の新たな風景を、小野は積極的なものとして引き受けようとする。詩人は「凡そ私の空想から遠い古い大阪が又ここに現出しようとしている³⁹⁾」と書くだろう。ただ、この古い大阪は懐かしい大阪という意味ではない。それは古代の大阪であり、つまりは誕生しつつある大阪なのだ。われわれの詩人は、焼け跡と瓦礫の光景を、過去と現在の混在として眺めている。早すぎたポストモダニズムであろうか、あるいは遅れてきた崇高の美学というべきなのだろうか。彼は、古代都市の遺跡の「計り知れざる魅力」を語りつつ、「空襲によって完膚なきまでに破壊されたわたしたちの都市の相貌」は「なおかかる美しい非情の幻影を私に与え」と書き付けていた⁴⁰⁾。「未来の新しい美に対する構想も、私たちが現代の荒廃や破壊をどの程度に感じているかによつて決まる」のであるから、「表面だけつくろつてどうにか間に合わせよう」としてはならない。

強い純粹な精神のために言い添えねばならない。荒廃と破壊の中に身を沈めることによつて、或はデカダンスをすら許容することによつて、わたしはそれを考えたい。

いくら焼け跡派めいたそぶりで、彼はそのように書き記すだろう。この都市の未来が田園都市の方向には存在しないことは、もはや自明のことであろう。

田園都市などというものはまだわれわれの柄ではないらしい。私たちが好むと好まざるにかかわらず、都市計画が追つつかうが追つつくまいが、自然の勢をもつて、わが大阪はその中心地点をバラック建で埋めて、今や再び人口二百万くらいの龐大にして憂鬱なる大都会となりつつある⁴¹⁾。

もはや分散は、われわれの都市の未来ではない。詩人はある種の解放と諦念、そして「精神の憩い」とともにそのように考えている。目の前に現出した大阪には、高村が新たな東京にかつての江戸を幻視したように、失われた過去の都市、古代の大阪が重ね合わせられている。だ

³⁸⁾ 同上, p. 193.

³⁹⁾ 同上。

⁴⁰⁾ 同上, p. 195.

⁴¹⁾ 同上, pp. 195-6.

がそれはバラック造りの街並みであり、いつだって「またぶつこわせばいい」と考えている、そうした大阪である。「運配、欠配の連続でいよいよ大量餓死の危機すら考えられている」のに、「しかし近頃の盛り場の人のでの物凄さはどうだろう。」小野は、高揚とともにというよりは、むしろ淡々と記述してゆく。そして端的な事実を次のように書き留めるだろう。

「とにかく私たちの都会は巨きいのだ⁴²⁾。」

10.

ああ、なんと美しい、なんと崇高な廃墟。なんとしっかりした、そして同時になんと軽やかで、なんと確かで、なんと自在な筆の運び！ なんとという効果！ なんと偉大な！ なんと高貴な！ この廃墟は誰のものかわたしに教えてくれないか。わたしはそれを盗みたいんだ。そう、素寒貧にできるただひとつのやり方⁴³⁾。

それぞれ、われわれは詩人の慧眼を素朴に褒め称えることの難しい地点にまで立ち至ってしまっている。集積と分散と、そして破壊と再建、さらには自然と人為とをめぐって、われわれの文明は、同じ問いを繰り返し、同じ解答と、同じ躊躇、同じ沈黙を繰り返してきた。ここであらためてその歴史を振り返ることは控えておこう⁴⁴⁾。ここでわれわれが確認しておくべきは、小野が感嘆をもって眺めた、「精神の或る非情性」とは、断固たる政治的意志と呼ぶべきものであったはずだということである。だがここで彼は、ついにそれを自然とほとんど同一視してしまう。巨大な廃墟を作りだした空爆は、「人為的な破壊力の暴威を感じるよりも、何かしらもつと運命的な自然の大荒廃」と呼ぶべきものであると。このとき、政治的意志であったものは、同時に自然の猛威と区別しがたいものとして、建設と荒廃とを同時にもたらずなものとなった⁴⁵⁾。

廃墟に魅入られ、廃墟を幻視し、廃墟をもたらずことで、そのなかに再生の契機をさぐろうとするそれは、崇高という主題とともに、政治的主意主義、政治の美学化として考えられてきた。たしかにあのとき十三郎が見たものは、震災ののち後藤新平を苦しめ、また戦争の後に石川栄

⁴²⁾ 同上。

⁴³⁾ Diderot, « Salon de 1767 », *Œuvres complètes de Diderot*, tom XI, Garnier frère, 1876, p.228.

⁴⁴⁾ 拙稿「洪水のあと — 3・11以後のアナーキズムと社会国家」『社会思想史研究』no. 36. 2012. を参照されたい。

⁴⁵⁾ すでに述べたことでことであるが、この認識 — 戦中において小野を支えた崇高という観念 — は、戦後になって獲得されたものではないことをもう一度ここで確認しておく。

「とまれ私はいま日窒が朝鮮でやつている大堰堤（ダム）のやうな／自然の破壊の流儀は好きだ。／その先がどうなるか。／その先々のことは／誰にも分からない」小野十三郎「未来風景」『風景詩抄』（前掲『小野十三郎著作集』第一巻, p. 177.）

さて余談に渡るが（渡るのだろうか？）このダムによって作られた電力は興南工場をはじめとした日窒が朝鮮半島北部に建設した工場にもっぱら供給された。戦後、これら工場からの引き揚げ者のうち、会社に残ることのできたものは、残された唯一の工場である水俣工場で働くことになる。つまりチッソ株式会社であり、そこでは、この日窒の興南工場で用いられていた技術が転用されることになる。

耀らの手足を縛ることになった、あらゆる抵抗としがらみを、断固として排除するという強い政治的な意志であったはずだ。だがいまやそれはいささかの抵抗もなく、むしろ「運命的な自然の大荒廃」と等しいものに成り代わっている。いや、問うべきは、はじめからそれは「自然の大荒廃」と等値されうるものとして感得されていたのではないかということであろう。先に引いた「破壊ということ」というエッセイの中で小野は、廃墟と化した大阪をいくらか躊躇しながら、沙漠になぞらえていた。「沙漠や鹹湖の荒涼たる自然は、その時、私の精神の中に映じて何物かに対する私のはかない抵抗をしづかにささえてくれたものに違いない⁴⁶⁾。」小野はそうのように書いている⁴⁷⁾。

もしそうであるならば、わたしたちがこれまでそうしてきたように、「精神のある非情性」なるものを、政治的意思と呼ぶことはどこまで適切なことだったのだろうか。

11.

この事件の本質は、たとえば、偉大なものが矮小なものとなり、あるいは矮小なものが偉大なものとなるといった類の、人びとがなした偉業あるいは悪行などにはない。つまりあたかも魔法によって、古からの輝く政治機構が消え失せ、まったく別のものが地の底から出現したといったようなものではないのだ。それは、ただ、〔この事件を目撃した〕観客たちがどのように考えたかということのうちにある⁴⁸⁾。

この論を閉じるにあたり、ユートピアについて、少しだけ考えておきたい。というのも、小野の田園都市とは実在してしまったユートピアでもあったからだ。たしかに災厄（あるいは災害）とユートピアとのあいだにも、緊密な結びつきが存在している。ユートピア物語を生み出した政治的人文主義は、古典古代の文明の廃墟の上に成立し、先立つ世紀から引き継いだ同時代のヨーロッパの混乱 — 飢餓と貧困、宗教上の抗争と僭主の支配、さらには領主と都市、そして国家との戦争 — を糧として生まれた思想であった。災厄はテキストの外側であって、モアの『ユートピア』というテキストを外部から支える条件ともなっていた⁴⁹⁾。つまり外部における恐怖。そして内側に幸福。

ただし、この文芸の伝統において、ユートピアは「外側」において、ひとつの距離とともに語られてきた。それがつねにヨーロッパの外に置かれ、不意の嵐によって辿り着いた旅人によって報告されるのは偶然ではない。さらにこの場所性は、空間的なそれだけではなく、テキスト

⁴⁶⁾ 同上。

⁴⁷⁾ ただし小野自身が意識していないのは、この沙漠は、同時に「古代都市の遺跡」、「近い過去において風塵の中に埋没し去つた古楼蘭などのような都市の廃墟」と一対のものであったということである。つまり、この節の冒頭で引いた、デイドロのサロン評に典型的に見られる崇高の美学という図式に、過不足なく収まっているということである。

⁴⁸⁾ Kant, « la conflit des facultés », *Œuvres*, Paris, Pleiade, t.III, p. 896.

⁴⁹⁾ トマス・モアの『ユートピア』においてそれはテキストの二重化としてあらわれている。ひとたび書き上げられたのちに付け加えられた、ユートピア島の報告者ヒトロダエウスとの対話のあと、

のレベル、つまり書き手と読み手という水準においてもつねに確保されていた。モアそのひとも、ひとたび物語を書き上げたのち、対話編を付け加え、自身を登場させたうえで、結局は暴力と僭主の支配する現実世界へと戻ることを選択させる⁵⁰⁾。つまりモアは、二つの部分に分かたれたこの物語において、劇中劇の聞き手、あるいは「観客」としての立場を劇中で割り当てられていたのである。ユートピアからの帰還者ヒトロダエウスの語る物語が終わると、劇中人物であるモアとヒトロダエウスの短い対話編が始まる。結局ふたりは別れ、モアは飢餓と病、貧困と格差、宗教戦争と僭主支配のヨーロッパにふたたび戻ってゆくのだ。モアがこの対話編を付け加えることにしたのは、ユートピア物語が理想の共同体の条件を探ることをその任務としており、それゆえにジャンルとしてのユートピアには、すべてをゼロに戻す「はじまり」への渴望が存在していることに気がついていたからかもしれない。

その意味で、佐藤春夫がいささかシニカルとも見える身振りで確保したユートピアへの距離は、この文芸の伝統に忠実であったということ以上、こうした物語を語るうえで、必須の態度であったというべきであろう。そうした距離を確保する技術をもし政治の学と呼びうるのであれば、まさにそれこそが災厄の政治学ということになるだろう。

今日の時点において、われわれがすでに災厄のあとにいるのか、あるいはまだなかにいるのか、判然としない場所に置かれてしまっているだけに、われわれはこの災厄の語りには十分すぎるほど注意しなければならないことは確かであろう。小野十三郎も、そうした距離を確保しようとしていたと読むことは可能であろうか。われわれが呼び出した詩人は、はたしてほんとうに、この十分な距離を対象とのあいだに保持しえたであろうか。ヒトロダエウス＝高村にたいして、彼はみずからモアの立場に立とうとしたと読むことは可能だろうか。もしそれが可能であるとすれば、「美しい非情の幻影」と語り、また焼け跡派めいた身振りのさなか、ふと来たべき大阪を「憂鬱なる大都会」と評してしまったわれわれの詩人のこの小さな違和感だけが、私たちに距離への手がかりを与えてくれるものかもしれない。

V. ある幻想の現在

12.

最後に、私たちもこの文芸の形式を忠実にたどり、後日談をひとつ付け加えておこう。

わが大阪の明日は、工業地域、準工業地域、住居地域、商業地域と、分けはいまよりもさらに画然となり、その間を縦横に広々とした道路が貫通している。地下鉄は高架となって、市内から市外各所にのびている。千里山の団地はすでに完成して日本一の規模を誇っている。海は埋め立てられ広大な工業団地となり、大鉄鋼コンビナートをはじめ、かつては空想科学小説の世界しかなかったような重化学工業センターがそこに現出している。市内の数カ所に大公園があり、大阪城森林公園がその名のとおり

⁵⁰⁾ Quentin Skinner, « Thomas More's Utopia and true nobility », *Vision of Politics. Volume 2 : Renaissance Virtues*, Cambridge UP, p. 218.

実現されていることはいうまでもない。京阪神の三都は完全につながって一つの带状都市となり、遠くに明石海峡の夢の架け橋が見える⁵¹⁾。

これは焼け跡から20年が過ぎ、市内のデパートで行なわれた「明日の近畿と大阪展」と題されたイベントで、そこに展示された未来の大阪の姿である。齢六十を超えた小野が目当たりにしたのは、「重化学工業の加速度的な発展」によって、工業都市として繁栄する大阪である。それは葦が繁る、人寂しい取り残された廃墟の風景どころか、「もっと近代的相貌」をもった未来都市であった。このとき葦原は消えゆく風景となっている。小野はこれを見て、「商売人の町だといわれてきた大阪のその大阪らしさとはちがった、それよりもまわりも二まわりも大きい、解放された大阪がそこにあるような気がして、わが大阪もなかなかやるわい⁵²⁾」と思ったと書くだろう。

いつしか詩人は、南部の高級住宅地近くに立地する女子大学で教える身分となり、それどころか「大阪市緑化推進本部」に「一詩人の資格で参与」する「緑化推進委員会」のメンバーですらある⁵³⁾。「四年後の万国博」にむけて、再建された大阪城を取り囲むように一大公園を建設すべく設置された委員会で、しかるべき助言を行う役割を引き受けもしたのだ。大阪市の進める緑化推進運動、「花と緑の運動」の方針にたいしてもきわめて忠実であって、たとえ「路地の奥のアサガオの棚」がかつてどれほど風情があったにせよ、いまやそうした各家庭の緑化には、むしろ疑念を表明し、「各戸ごとにあった庭の空間を一つにかため、大遊歩場か大公園にすることこそが緑化の思想ではないだろうか⁵⁴⁾」とさえ語る。見事な転向と呼ぶべきだろうか。

その一方で小野は、いささか過剰なまでに「大阪的なもの」を否定しようともしている。「文楽」のなかにも、「島之内や船場」のなかにも、あるいは織田作の描く「どこんじょ」や「どうしょうぼね」のなかにも、守るべき大阪は存在しない。「道楽にせよ、学問考証にせよ、大阪の諸人士が自分の経験にもいわせて語る大阪文化のその文化の内容には、文化の名において、われわれが継承するに値するものは、その人たちが考えているほどはたくさんない」と冷や水を浴びせかける。

焼け跡の思い出すら例外ではない。それは思い出として美化されてしまった闇市の風景にすぎず、結局は「老人どうしの一種のなれ合い」でしかない。そこには「次代の人間に役立つような人生的な意味あい」などはいっさい存在しない。彼は過去を切り捨て顧みない。例外は、釜ヶ崎の日雇い労働者たちだろうか。しかしそれは彼らの多くが、「生粋の大阪人ではない」からでもある。「大阪的なもの」のすべては否定の対象なのだ。

⁵¹⁾ 小野十三郎「スモッグ破る緑の大木」『大阪—昨日・今日・明日—』角川新書, 1967, p. 88.

⁵²⁾ 同上。

⁵³⁾ 同上, p. 75.

⁵⁴⁾ 同上, p. 82.

13.

そうであれば、この大阪城森林公園は、「大阪」のほとんどすべてを否定する小野が、残すべきと考えていたただひとつのものだということになる。小野は、こうした都市計画の見事なパノラマが何か重要なことを欠落させているのではないかということを手問もし、またみずから言い聞かせるように、大阪は貧しいからこそ、こうした緑化事業が必要なのだとつぶやきもするだろうが、やはり小野の田園都市批判を追いかけてきた者からすれば、いささか虚を突かれ、呆然とせざるをえないだろう。

いくらか気が引けたのだろうか、この公園は、たんに大阪城公園と呼ばれるのではなく、大阪城森林公園と呼ばれるべき規模と内容を誇るものだと言い足してはいる。それは「四十年昔に、高村光太郎が提唱した東京雑草原の構想と似ている」が、たんに「都心に雑草のおいしげっている広大な原っぱを残そうという夢」や「家庭緑化というようなことだけ」では到達できない、そうした一大森林公園なのだと。いささか拍子抜けの後日談というべきだろうか。

ただ、小野のために、もう少しだけ、この森林公園にとどまろう。それは鉄でできた廃墟でもあったからだ。「残しておきたいもの」。そう題された章で、もはや大阪には、残すべき名所旧跡のたぐいなど存在しないことをまず確認したうえで、しかしそれでも残すべき文化財、「人間の文化への志向を定める拠点」はほかにあると小野は書き記す。それは「遠い歴史や伝統にかかわるものでなく、ついきのうそこにあったものであり、いまもなお残骸をそこにとどめているもの⁵⁵⁾」である。環状線の京橋駅を過ぎたところ、車窓の左側に見える「巨大な鉄骨の林」、[かつて、アジア最大の兵器工場といわれた元大阪陸軍砲兵工廠の焼け跡]がそれである。現在、大阪ビジネスパーク（OBP）から、平野川を挟み大阪城ホール、市民の森を含み、さらには環状線を越えて操車場、森ノ宮団地に広がる地域である。「工場だけで十二万坪、敷地全面積三五万六五〇〇坪という、大阪城に隣接したこの広大な兵器工場」は、敗戦の前日、昭和二十年八月十四日、「二百数十個に及ぶトン爆弾が投下され、数千人の人間が死んだ場所」である。戦後ながらく放置されたこの場所は、屑鉄を掘り出すためのアパッチたちが活躍した場所として、『日本三文オペラ』（開高健）、『日本アパッチ族』（小松左京）そして『夜を賭けて』（梁石日）と、いくつもの文学、映画の舞台ともなってきた。

詩人は残すべきものとして、重工業の大阪を選んでいたので。この大阪は彼の現在であったからだ。小野にとって記憶は現在である。砲兵工廠を残骸のまま残すべきであると彼がいうのは、それが「遠い歴史や伝統にかかわるものでなく、ついきのうそこにあった」ものだからである。それは同時に巨大なこの鉄骨の森林で、鉄を食ってその身を変容させていた「アパッチ族」たちが住む大阪でもある。

原爆ドームをとりこぼつか保存するかは、広島市民の決定に任せてもいいけれど、我が大阪は、そう早く整地を急いで、この旧砲兵工廠の最後の残骸を取りのぞくべきで

⁵⁵⁾ 同上, p. 152.

はないと考える。相次いで出現する高層ビルやハイウェイによって、都心はいうまでもなく、周辺部の相貌も日に日に姿を変えつつある今日、大阪のどこかに、このような戦争の痕跡をまざまざと感じさせる場所が一つぐらい残っていたっていいのである。大阪城の景観がそれによって損なわれるというようなことは絶対ない⁵⁶⁾。

だが大阪城は森林公園とはならなかった。鉄でできた廃墟の森林は私たちの幻想の中にしか存在しない。現在、そこにはまるで「廃墟の地底から現出したような⁵⁷⁾」高層ビル群が建ち並んでいる。小野のユートピアも幻想の未来になった。私たちにとっては、そうであったかもしれない現在である。かつての工場がつぎつぎと閉鎖され、高層マンションやショッピングセンターへと転換されている現在、重工業は葦原に続いて、大阪の失われつつある過去になりつつある。2015年からは、大阪城公園も、メディア産業、そして不動産関連事業主からなる事業体に管理がゆだねられることになった。ますますそれは「アミューズメントパーク」としての色彩を強めていくだろう⁵⁸⁾。これが小野の大阪がたどり着いた地点である。

それは、私たちにとっての憂鬱な都会というべきだろうか。

⁵⁶⁾ 同上, p. 154.

⁵⁷⁾ 梁石日『夜を賭けて』幻冬舎文庫, 1997, p. 513. 物語中、大阪城公園は大阪森林公園と呼ばれている。

⁵⁸⁾ 大阪市ホームページ「【報道発表資料】大阪城公園パークマネジメント事業予定者（大阪城公園及び他5施設の指定管理予定者）を選定しました」<http://www.city.osaka.lg.jp/hodoshiryo/keizaisenyaku/0000284250.html>, 2016年1月5日現在のアドレス。

Ono Tozaburo and his “Garden city”

MAEGAWA, Masayuki

During the last period of Second World War, Tozaburo Ono, anarchist - poet, wrote poems and essays on the landscape of industrial zone spreading over the bay area in his hometown, Osaka. He imbued them with a critic and antithesis of garden-city program, harmonious reconciliation of rural sanity and urban vitality promoted by the social reformers at that time.

But curiously, in the same essay, he appreciated the government decision of the scatteration and decentralization of industry, whose philosophy was based upon the regionalism developed from the idea of garden city project. This contradictory attitude of our poet could be explained by his political tendency of anarchism who had a double requirement of dissolution of centralized government and the subversive power to demolish the status quo. Our poet was fascinated by the impersonal and supreme power of the government and he aesthetized his political position by the scheme of the aesthetics of sublime.

Following the development of his thought, we could recognize an schmittian decisionism prevailing among the anarchists at that age.